

平成23 (2011) 年度 卒業研究要旨

11080001 A. H. T. S. A. シルバ

「スリランカと日本の文化の違い」

スリランカ人は「アーユボーワン」といって、手を合わせて挨拶をします。日本で手を合わせるのは、亡くなった人に対する時や、お寺で仏様に挨拶する時などである。

スリランカ人は仏教が生活の一部になっており、仏教の教えを実行し、生活面で常に宗教観が宿っている。しかし、日本人はそうではない。お寺に行くことも仏教を勉強することも少ない。このような状況を文化差として、考察したものである。

11080002 秋元 啓佑

「明治期における日本語の発達」

日本語は、明治維新を機に大きく変化した。「日本の近代化は日本語の近代化」ともいわれ、特に西洋文化の影響を受けて発達した。西洋文化を目の当たりにした際、自国の言語力の弱さを知り、外来語をはじめ、漢語、ローマ字を取り入れ国語の強化をはかった。それを明治期の数々の著名人が独自の方法で新しい文法・文体をつくり、小説・新聞で人々に広め、それが受け継がれていき、我々が普段使っている日本語になっていった。

11080003 井川 雄亮

「音楽背景にみる歌詞の役割」

ヒットする曲とは、必ず歌詞にその人の心情や思いなどがこめられている。これは日本人が歌に対して自分の体験等を投影することを好んでおり、愛や戦争などの心情を映したものが多い。こうしたことが要因となり楽曲には、音的要素の個性が薄れている。

歌い手と楽曲は似た構成のものが多くなり、ヒットする要因には「有名人の歌」など売れる魅力の変容がうかがえる。音楽不況といわれる現代の楽曲にはどういった改善が必要なのかを明らかにしていく。

11080004 石井 瞳

「宗教意識に影響を与える映像文化」

現代日本人は、正月など宗教と関係ある文化を一種の娯楽と認識し、宗教意識が薄いことは明らかだ。しかし、現代日本文化と日本人の宗教意識の関係については明らかでない。そこで本稿は、現代日本文化の一つであるアニメ「もののけ姫」「かみちゅ！」を用い、作品に表れる宗教的要素が

視聴者にどのような影響を与えているか調査した。その結果、アニメに表れる宗教的要素は視聴者に宗教への興味・親近感を与えることがわかった。

11080005 石田 涼

「異文化が生じる原因」

この世の中には、環境や生活、言葉の違いによって数多くの異文化が存在している。

日本と世界とを比較した時に異文化が生じる事はもちろんのこと、日本全国の中だけでも文化の差は数多く存在している。

そもそも、なぜこのように数多くの違いなどが存在して文化に差が生じるのであろうか。本論考は、日本と中国との文化の違いを各項目にわけて比較し、その背景や現象について言及したものである。

11080007 禹 昇南

「日本語教育における言語習慣の考察」

社会習慣や家族制度などの文化的背景が日本語に影響を与えている。これを理解していないと、日本語学習者が使う日本語は単調になりやすいようだ。本稿では日本の言語習慣の影響がみられる言葉を調査し、それらの言葉に対する学習者の理解力と表現力を向上させるために必要な事は何かを考察し、言語習慣や文化を客観的に理解し、学習者自身が言語習慣を深く考える機会を与えるシステムが必要だということがわかった。

11080008 于 玲

「日本社会でなぜ敬語が重視されるのか」

日本は礼儀を非常に重視する国である。敬語使用は礼儀の一種として重要な役割を果たしている。特にビジネスの場面においては、敬語はさらに重要な位置に置かれる。敬語が使えないとビジネスがうまくやっていけないほどで利益にも関わる。本論ではなぜ敬語がそんなに重要なのか、日本社会においてどのような役割を果たしているのかを明らかにする。敬語を正しい使用について最近の傾向と問題点考察すること。

11080009 内田 美沙

「擬態語・擬音語の分類から見る言葉とイメージの関連性」

言葉の意味と発音から感じ取れるイメージには、関連性があると考えられる。特に、擬態語・擬音語は、様子や音から派生された言語であり、“感覚的に作られた”言葉である。つまり、擬態語・擬音語は、日本人が抱く言葉と音のイメージを具現化したものといえる。そこで、擬態語・擬音語の音とイメージについて、特に、繰り返し語について調べた。その結果、13の音についてのイメージが示された。

11080010 王 寅セイ**「外来語の日本語に与える影響について」**

外来語が日本に入ってきてから、今や、日本語には欠かせないものになっている。日本語の外来語とは、借用語のうち、漢語と漢語導入以前の借用語を除いたものである。外来語は主に西洋諸言語からの借用であり、洋語とも呼ばれる。カタカナで表記することが多いことからカタカナ語とも呼ばれる。

本論文は、近代日本語に与えた影響について、歴史的視点及び音声、表記、語彙の点から追究し、その功罪と今後の課題について論述した。

11080012 大久保 宏**「日本における文学者の自殺とその精神的疾患について」**

日本において、自殺という方法で自らの命を絶った三人の文学者、芥川龍之介、太宰治、金子みすゞについて、なぜ彼らは自殺という手段で自らの命を絶たなければならなかったのか、そこに至るまでにはどのような精神的な問題が起こっていたのかを、彼らの生涯、家庭環境、人格などから考察する。また、彼らが現代医学ではどのような精神的疾患を持っていたのかを、彼らの当時の行動、言動などから推測する。

11080013 長 かおり**「日本における年中行事」**

国際交流が進む中、日本人として自己を主張し、他文化を理解していくために、日本の催事について、韓国との比較を通じて考えた。その結果、日本は多彩な祭事と食文化があることが分かった。これは日本に四季があり、その中で生きてきたこと、中国や韓国をはじめ他文化から多くの影響を受けたこと、土着の信仰が根付いていることと深く関係する。祭事と、それに伴う食文化には我々の祖先の知恵や考え方がしみ込んでいる。

11080014 小澤 雅樹**「水のメタファーの使用について」**

人々は、日常会話の中で、物事をわかりやすく伝えるために何かに喩えることがある。そのなかで、「～のように」という直喩同様に、メタファー（隠喩）もよく使用している。メタファーは、抽象的な概念を具体的なものや日常的で分かりやすいことにたとえており、人々はメタファーだと気づかず使用している場合が多い。そこで、本研究では、よく使用されている水のメタファーを取り上げ、使用頻度と使用動詞の関係について研究した。

11080015 何 小姜**「外来語の受容について」**

日本は先進的な文化を受容してきたが、その特徴は自国に適応できる文化だけを受容してきたということだ。明治維新後の日本は、自らを近代化し、西欧に追いつくことを目的として、西欧の制度、思想、文物を次々に取り入れた。外来語はそのために必要な道具の一つであった。拙稿では、外来語はいかにして日本語に取り入れられたか。また日本人はいかにして外来語を受容してきたかを整理し、外来語の日本語における影響を考えた。

11080017 郭 香英**「日本と中国の絆—漢字—」**

日本人の文化や生活、また伝達活動のなかで、漢字は重要な働きをしている。漢字は中国で生まれた文字であるが、現在の日本社会における漢字、漢語は中国からの借用である。しかし完全に日本で生み出された語という認識もある。

漢字はいつ頃、どのように日本に伝来し、日本語のなかで定着したのか、そのことについて考察した。また、将来日本における漢字文明はどうかについて、探求を試みたものである。

11080018 加藤 純**「日本語学習者の格助詞の誤用と指導法」**

近年、日本語学習者は増加の一途を辿り、2009年度の学習者数は約365万人（国際交流基金2010速報値）にまで増加している。日本語学習者の誤用の問題も日本語学習者数の増加とともに増加することが予想される。そこで、日本語学習者の格助詞の誤用を調査し、「名詞+格助詞」を正しく教え、次に来る動詞を予測できるようになるのが最善の方法と結論付けた。また、格成分の省略についての指導法も書き記した。

11080020 河内 美穂**「漫才のボケとツッコミ—昭和と平成を比較して—」**

漫才はただ会話をしているだけなのに、なぜ面白いのだろうかということに疑問を持ち、漫才の会話の分析を行った。

まず、漫才の歴史やボケとツッコミの役割について調べた。次に、昭和と平成を代表する四組の漫才師のネタを文字起こししたものを使って、話題、笑わせ方、そのパターン、笑いのツボ、会話の原則、談話の構成の各要素について比較分析し、それぞれの漫才の笑いの特徴の変化を調べた。

11080024 キョ ヘイン**「日本語教育について注意すべき点」**

日本語教育では、外国人学習者の増加と多様化に伴って教師が必要とする知識も学際的な分野を

含んで拡大している。中国人留学生として、日本語を勉強する時、間違いやすいところを例にして、日本語教師が日本語を教える時、注意しなければならないことを指摘した。具体的には、相槌のしかたをとりあげた。日本語を教える際には、使い方、字面の裏の意味に加え、対照研究の成果も応用すべきであることを指摘した。

11080025 金 珍玲

「情報技術に依存する日本語学習法の問題点について」

科学技術の進歩によって私たち日本語学習者は、たくさんのハイテクノロジーを学習の過程に取り入れている。ハイテク手段に依存する日本語の学習方法は、私たちの学習効果においてどのような影響を与えているのかは、とても興味深く思う。本研究は、この問題について、普段感じた事象を取り上げて日本語学習者の感じ方を調査した。その結果、ハイテクに依存する日本語学習法への過信が危惧されるという結論になった。

11080026 クォン キョンホ

「2ちゃんねる語の調査」

若者言葉の一種である2ちゃんねる語に興味を持ち、この2ちゃんねる語がどういうふうに広がったのかを調べることにした。そこで2つの仮説を立て2回のアンケートを取った。

しかし、このアンケートの結果から、本当に2ちゃんねる語が日本全域に広がっているのかが示せなかったため、2ちゃんねる語の中からランダムで2つの言葉を選び、日本全域分布図と使用している年齢の世代表を作成した。

11080027 楠 幸彦

「なぜ『大丈夫』は多用されるのか？」

「大丈夫」は日常生活の至る所で見聞きする言葉である。しかし、この言葉は最近では多用されるあまり誤用とされている表現にも用いられている。たとえば、否定を表す語「いいえ」を抜いた状態で使用される「大丈夫です」や、「大丈夫」を強調した「全然大丈夫です」という表現である。本論文ではそれらの誤用とされる表現がなぜ誤りとされているのかに触れつつ、なぜこの「大丈夫」という言葉が多用されるのかを考察した。

11080028 具 キョウジュン

「青信号が導いた場所はどこか」

毎日のように出勤、登校、買い物など何をしようにも必ずと言っていいほど、目的地に着くまでにいくつかの信号機で信号を待つ。しかし、目的地まで信号を待たずに行けるという事はあまりない。そこで、目的地に着くために信号を待つのではなく、青信号の方、また、分岐点で一定のルールで進行すれば何処に着くか、という実験を行った。その結果、4日間で、32時間11分、202.96km

進み、出発した場所に戻ってきた。

11080029 恵 靈智

「日本の敬語と中国の敬語の相違点」

日本と中国の間では、古い時代より文化、貿易、習慣の各方面において親密かつ深い関係を築いてきた。言語面から見ると、両国では、同じもしくは似ている漢字・語彙が多いことに気付く。しかし、敬語表現については、中国の表現手法は日本語の表現手法に比べて大きな違いがある。

本論では人称代名詞と敬称に焦点を絞って、現代中国語における呼称の敬語表現について日本語と比較しながら考察していく。

11080030 ケット ヴィーラック

「カンボジア人の日本語学習者の条件文の習得」

日本語を学ぶカンボジア人は条件文の習得が難しい。日本語で条件文を使うときは、さまざまな制限がある。カンボジア語で条件文を使うときに接続するものに制限はない。そこで、カンボジア語母語話者に対する日本語の条件文の習得方法を考えた。『if』は英語で制限もあり、カンボジア語とは異なるので、英訳をもって日本語の条件文は説明できない。どのようにカンボジア人に条件文を考えればいいのかについて論じる。

11080031 顧 成

「嫌われる方言 上海語」

上海語は中国の方言の中でも一番異質であるため、普通話と上海語とはまったく通じない。上海市戸籍を持つ人以外の出稼ぎ労働者が897.7万人いるが、ほとんどは上海語が喋れない。そのうち、上海語が嫌いという人がたくさんいると見られる。上海語を使用禁止にすべきという主張を言う人も存在する。今上海に暮らしている50人の外来者たちにアンケート調査を行うことで、上海語が外来者たちに嫌われる原因を明らかにする。

11080032 小村 学

「散文についての実体験を伴う研究」

論文の内容を決めるのに際し、当初は散文や小説の内容を研究しようと考えた。しかし、それらには様々な解釈が存在する。各々が主観をもって判断するため、十人十色の感想があって当然だと考えられる。また、見方を少し変えただけですぐに変化してしまうものでもあった。

そこで、この論文では筆者に焦点を当てた。自らが筆者になるのである。その時どのような文章が生まれるのかを研究した。

11080033 近藤 慧**「伝わらない日本人の表情―日・韓・中・米の比較調査から―」**

日本人の表情は海外の人にとって、読み取りづらと言われる。しかし、本当にそうなのかという疑問から、アンケート調査を行い、分析・考察した。調査方法として中国人・韓国人・アメリカ人の留学生と日本人大学生を対象に、日本人の様々な表情の男性と女性の顔写真を見せて、その表情がどのような感情を表しているか答えてもらった。そして、その結果を全体結果と国別に分けて考察した。

11080034 近藤 浩志**「介護に必要な日本語コミュニケーションの実態について」**

現在、介護福祉業界については、利用者の増加に伴い、事業者への期待や要求水準、およびサービスの種類や質に対する関心がますます高まってきている。

そこで本論考では高齢化の進行により高まったニーズに応えるべく、介護福祉業界全体の歴史や分析をふまえ、実際の利用者に不安を与えないような日本語で接触することが、重要な課題になってきている。ここでは、そのコミュニケーションの実態を考察し、言及したものである。

11080035 サイロット（宮寺）ナムホン**「タイ王国社会における日本文化」**

最近タイにおいて、国際化の波は広がっている。取分け、日本文化は首都バンコクはもとより、地方にも影響を及ぼしている。日本製の車、電気製品などは関心が高い。タイの若者達の間では、日本のファッションや食べ物、漫画などが大流行している。特に、ゲームや音楽J-POPなど、日本から入ってきたものがタイの人々の心を虜にしている。本論は、この現象と実態について検討し、サブカルチャー文化の実態を解明したものである。

11080036 坂井 花絵**「高校生中国帰国者の日本語指導の実態と問題点」**

中国残留邦人の家族として日本で暮らす高校生がいる。彼らに対する日本語教育の実態をまとめた。現在、日本語指導が必要か不必要かの判断は高校ごとにまかされている。その上、公立高校で中国帰国者を受け入れているが、小・中学生のための文部科学省が作成したカリキュラムはあっても高校生のためのカリキュラムは作成されていない。さまざまな面から高校生中国帰国者への日本語指導に関する問題点と実態を探った。

11080037 佐藤 常道**「長野県における方言について」**

日本語には共通語（標準語）と方言がある。方言は地域ごとにイントネーションや意味が異なり、

その地域でしか伝わらない言葉でもある。地域差からみた各地域のことは、地域差そのものがなくなる限り方言は存在する。

方言は、いつの時代から「方言」といわれ、共通語と区別されたのか。また、「新方言」とはどのような現象なのか。これらを中心に考察しながら、長野県の方言について言及する。

11080039 志水 勇太

「沖繩と人—歴史と文化・沖繩の人々の意識—」

独特の文化を持っていた琉球国は、大きな政治的変動を被ってきた。島津氏に攻め入れられ、また明治政府の廃流置県により「沖繩」へと名称が変えられてしまう。さらに第二次世界大戦により、沖繩はアメリカの統治下となる。しかしながら、その独特の文化は、習慣や食、また名字などによって現代に繋がっている。アメリカに統治された沖繩は、様々な問題を抱えており、今後もその動向が注目される。このような歴史と現状をまとめた。

11080040 朱 国光

「『奥の方』と『後ろの方』の使い分け」

これまで、「奥の方」と「後ろの方」の区別は明確に分からなかった。辞書に、定義が沢山書いてあるが、辞書には「奥の方」と「後ろの方」の違いの説明は見られなかった。辞書の「奥の方」と「後ろの方」に対する定義が不十分で、外国人は勉強する時、「奥の方」と「後ろの方」の使用で混乱する可能性がある。そこで、論文では「奥の方」と「後ろの方」の使い分けをまとめ、その違いを明らかにすることを目的とした。

11080041 周 李青

「アルバイトにおける接客用語について」

4年間のアルバイトの間に、正しくない接客用語をよく聞いた。正しくない敬語が気になったので、なぜ敬語を誤るのか、周りの人たちによく使う接客用語についてアンケートをした。「お召し上がりになりますか。」のような過剰敬語を使う人が4割を占めた。また、「お～になる」にすべて動詞を入れることが可能と考えている人が多い。接客用語を正しく運用するにはどうすればよいかについて考察した。

11080042 ショウ佑珊

「伝統のまつり—みこしと媽祖繞境（マツォユーギン）—」

伝統的な祭典は世界中でみられるが、私が研究したのは日本と台湾の祭典だ。両国で最も人気のある祭りはみこしと媽祖繞境であるが、この二つの祭典は、現在の若者にとってはそれほど関心の高いものではないといった観がある。しかしこの素晴らしい祭典を現代の若者にも理解してもらいたいと考え、私は両国の文化の祭典の研究を始め、一千年前の祭りはどのようにして生まれてきた

のか、そしてどこに相違点があるのかを調べまとめた。

11080043 白鳥理沙子

「ビジネス・コミュニケーションについての一考察」

職場には様々な立場、年齢の人が存在し、人間関係は複雑な集団である。この集団の中で仕事を円滑に進めるためには、目標の共有化が図れる良好な人間関係が必要である。良い人間関係を築く基本は相手を大事にする気持ちと言葉遣いである。

本稿では、言葉遣いや心配りに焦点を当て、「能力の育成」と「知識の獲得」の観点から、5つのビジネスシーンを事例として考察を行い、結果をまとめた。

11080044 慈 婷婷

「日本の自動車産業からみた—いすゞ自動車—」

商用車とえば、いすゞ自動車は「母親的」な存在である。また、歴史的にみても、日本の商用自動車産業界における「雄」と言っても過言ではない。1916年に創業以来、一貫して「妥協のない物づくり」にこだわり、世界の人々に豊かな暮らしを提供してきた。現在、最先端の安全性、経済性、環境性能、そして上質なサービスで、いすゞの商用車は世界百数十カ国で販売されている。このようないすゞの発展の要因と展望をまとめた。

11080046 鈴木 雄飛

「時代別における部落差別」

部落問題とはいったいどういうものなのか、なぜそのようなことが起こったのかその原因を調べていき歴史ごとに考えていく。そして今現在でも形を変えて存在していることを知り、調べていく中で、差別は「差別される存在」によって引き起こされるものではなく、偏見や先入観にとらわれてしまう人間の心理により起こるということがわかった。社会全体で解決していかなければならない重大な問題である。

11080048 戴 レイ

「日本語における敬語の重要性について」

敬語は日本語の中で重要な位置を占めている。敬語のシステムは、自分と相手との関係を明らかにしている言語上のシステムであると筆者は考える。特に中国語には敬語の表現は明らかにされず、その表現のくくりは大雑把である。そのシステムを日本語と対照的に見ていくことにより、その特徴を見出し、例文を比較検討し、場面と人間関係、それ以外の例外にも触れ、考察したものである。

11080049 高橋 彩子**「スポーツマンガにおける役割語の変化―昭和と平成のマンガを比較して―」**

マンガには多数のキャラクターが登場するが、それぞれ異なった言葉遣いをしていることに興味を持った。ある特定の言葉遣いを聞くと特定の人物像が思い浮かぶとき、その言葉遣いを「役割語」と呼び、役割語が昭和時代と平成時代でどのように変化をしているのかを調べたいと考えた。少年マンガでは『巨人の星』の、少女マンガでは『アタックNo. 1』の昭和版と平成版を同じキャラクターで比較し、役割語の変化を分析・研究した。

11080050 高橋 真実**「国語教育の重要性と教科書の関連、及び内容比較」**

国語力は近年低下をたどっているが、その問題点として「読書離れ」「英語の必修化」などが挙げられる。国語教育において一番身近な教材である教科書を出版社別に分析、比較し、内容にせまる。教科書と国語教育の在り方を考察する。読書、他者とのコミュニケーションを重ね、論理的思考力・情緒力がある「伝える力」を備えた日本人を数多く輩出するため、日本国民一人一人が教育者である自覚をもつべきである。

11080052 舘島 敏晃**「世界的災害で学ぶこと」**

今年3月11日に起きた東日本大震災。その死亡者、行方不明者、その数は合計で約2万人にもなった。この数字は阪神淡路大震災の3倍の数字である。

本論文は阪神淡路大震災、米同時多発テロ、チリの大地震、東日本大震災、これらの詳細や、チャリティーイベント、募金の総額などをテーマに上げ、私達が忘れてはいけない事、知らなくてはいけない事を伝えるのを目的としてまとめたものである。

11080053 辰巳 唯**「メールの感情表現」**

現代に欠かせないものとなっている携帯電話。その中でも、第一の連絡ツールとなっているメール機能。通常の会話では、声色や表情で相手に感情が伝わるが、メールでは文字以外では伝わらない。そこで絵文字が使われる。過去100件の送信メールを分類して、感情の表現方法や相手に送る内容を調べた。結果の一部を挙げると、「嬉しい」という感情は相手に強く伝えたいという気持ちから絵文字を多く使っていることが分かった。

11080054 張 海燕**「災害と言語、外国人在住者へのインフォメーションのあり方」**

2011年3月11日、東日本大震災が起きた。他に例のない大地震で、外国人の私はより多くの不安

を覚えた。恐怖と同時に、どのようにすれば自分を守れるか、一瞬分からなくなったのである。しかし、その時の私と同じ感覚に陥った外国人は数多くいたと報告されている。私はこの被災経験から、どのように外国人が困らないようにインフォメーションをすべきかをいろいろな方法を探して研究する必要を感じ、論をまとめた。

11080055 陳 江芸

「中国人日本語学習者の誤用について—自動詞・他動詞とそれに伴う助詞—」

中国人日本語学習者にとって、自動詞と他動詞の理解は非常に難しいものである。自動詞、他動詞、またそれに伴う助詞の使用例などは日本語初級教科書で取り上げられているが、それほど詳しく説明がなされていないのが実情である。そのため、間違った文章を作ってしまうことがたびたび起こる。本論では中国人がよく間違う表現の中から、自動詞、他動詞、それに伴う助詞についてその原因と解決方法について考えてみることにした。

11080056 土屋 薫

「現代日本語の変化」

現代日本語の変化として、「ラ抜き言葉」「……じゃん」「……じゃないですか」を取り上げる。

「ラ抜き言葉」「……じゃん」「……じゃないですか」は、無意識のうちに日常生活で使用してしまう言い方である。「ラ抜き言葉」は明晰化と単純化の二大変化理由があることが分かった。「じゃん」は、場面によって明らかな使い分けがある。「……じゃないですか」は、形容詞「ない」に付ける点で、日本語として新しい表現法でもある。

11080057 丁 玉成

「日中言語表現比較からみる異文化理解」

異文化に接する時、私たちは通常相手を観察し、次にその行動に自分なりの解釈を加え、自分の規範で評価を下してしまいがちである。お礼の表し方ひとつでも自分の規範で評価を下せば、日本人は「中国人は礼儀が足りない」と評価し、中国人は「日本人のお礼はうそ臭い」と誤解しかねない。本研究は、日中間の相手の言語行動特徴の比較を中心に報告し、誤解しやすいところを考察したものである。

11080060 哈斯 牧仁

「日本語コミュニケーションにおける『意図』理解の難しさ」

コミュニケーションを成功させるには、メッセージの意図を理解することがとても重要である。異文化コミュニケーションのなか、特にビジネスコミュニケーションでは、相手の言葉の背景にある価値観や行動様式、文化の違いなどを考慮することがどうしても必要になってくる。本研究では、コンテキスト、日本語の特徴、物事の表し方などが、どのように意図理解の難しさになっているか

を調べることを目的としている。

11080062 ひつ 明慧

「『顔』に関する慣用句の日中比較」

体に関する慣用句は日本語にも中国語にも多くあり、生活の中でも使われている。しかし、体に関する慣用句の日本語と中国語での比較研究はあまり見かけない。本研究はこれまであまり分析されていない「顔」に関する慣用句について、日本語と中国語での使われ方の違いを調べた。複数の辞書、辞典を通して、慣用句に表れた「顔」の意味を分析することで、日本語と中国語での「顔」に対して持っている概念の違いを明らかにする。

11080063 黄 昱勝

「日本殖民時期前後台湾への管理の歴史」

日本の台湾接収の初期状況は、抗日運動を武力鎮圧で対応するしかなく、多くの死者や破壊を生み出した。その後、日本は皇民化の政策をとり、台湾の人々の思想を切り替えようとした。推進すべきものは、工業や農業を発達させ、鉄道（交通網）の整備や水利事業を施工することによって、植民地経営を安定させた。当時の日本は台湾に対してどのような影響を及ぼしたのか、その経緯を歴史的に考察したものである。

11080065 福村 佳奈

「国旗に現れる色彩選択」

以前、ニュース番組で「太陽の色は何色なのか」というトピックスをみて、色彩について興味を持ち太陽の色が国旗にも反映されているのかを、国旗とそこに用いられている色の意味について考察した。調査結果からは、国旗の赤の色の意味で「太陽」として使われている国は、6カ国あり国旗の色に関係している国もあれば、関係していない国もあるという事がわかった。また、太陽は赤よりも黄色で連想されている方が多いこともわかった。

11080067 本間 成美

「現代人の和菓子に対する意識」

日本人一人当たりの和菓子消費量が減ってきていることは先行研究で明らかである。しかしながら、その原因については諸説ある。そこで本研究では、洋菓子と比較した場合の和菓子のイメージについて調査した。その結果、和菓子は日本の伝統的食文化と認識されている一方、実際に食べる場合には種類が少なく地味であり、餡が苦手だと言う人も多いために、洋菓子と比較した場合、あまり選ばれないことがわかった。

11080069 松裏 昂治

「日本における漢字の将来性」

情報化社会では、生活や仕事の中でコンピュータが使用されている。そのコンピュータを使用することにより、仕事の効率化や生活での知識の幅が広がってきていることは確かである。しかし一方で、漢字が書けなくなっている人々が多くなってきたのも一つの現象といえよう。そのような状況のもとで、漢字の将来はどのようなようになるのか、その変遷を辿りながら、情報化社会に対応すべき方法を提示し、言及したものである。

11080070 三浦あゆみ

「東北方言と共通語に対するイメージ」

現在各地で方言特徴が衰退しつつあり、「失われゆく地元の方言を大事にし、後世に伝えていこう」という意見が主流になってきている。近年、方言の話題を新聞やテレビが取り上げたり、周りでは方言に興味を示している友人もいる。「東北方言と共通語に対するイメージ」は、育った場所によって違うのではないかと考えた。東北育ち・関東育ち・第二言語として日本語を話す若い世代にアンケート調査を行い、結果を分析する。

11080071 三橋 悠樹

「狂歌百人一首」

狂歌百人一首とは、本家である「小倉百人一首」の全ての歌をもじって作った人たちの傑作集である。そのなかでも蜀山人という人の歌は他の狂歌師に比べ、歌としての面白さ・技術が共に抜きん出ている。古い言葉を使いながらも現代人に読みやすくなっており、蜀山人の江戸っ子気質が百人一首にうまく交わり面白可笑しく、かつ丁寧に仕上がっている。この狂歌百人一首全てを研究したいと考え論文のテーマとした。

11080072 宮崎 未央

「授業研究の方法としての授業分析—発問や助言の仕方を中心に—」

研究授業との相違を含め、授業研究について概観した。その上で、授業研究の方法としての量的分析と質的分析の特徴と問題点について言及した。これらを踏まえ、量的分析と質的分析両方の観点から取り組むことが可能な発問と助言の仕方に焦点を当て、教育実習で行った教壇実習の授業分析を行った。その結果と教壇実習後のコメントとを合わせ、実習生による自身の教壇実習の授業分析の方法の一つを提示した。

11080073 三由 雄樹

「スポーツと震災について」

去る2011年（平成23年）3月11日14時46分、宮城県牡鹿半島の東南東沖130kmの海底を震源

として発生した東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）は、日本における観測史上最大の規模、マグニチュード9.0（世界歴代6位）を記録した。この地震でたくさんの尊い命が奪われた。日本や世界のスポーツ界をも震撼させた。今回の震災でスポーツ界がどのような影響を受け、どのような行動に出たのかを調査しまとめた。

11080074 村西亜里紗

「恋愛ドラマにおける愛情表現研究—90年代と近年のドラマを比較して—」

90年代（1996～2000）の恋愛ドラマと近年（2009～2011）の恋愛ドラマで使われる愛情表現を比較し、時代の変化による表現方法の変化と傾向を捉えることを目的とする。近年のドラマではどのような愛情表現が使われているのか、また、90年代のドラマと比べて、変わった点と同じ点はどこなのかについて調べた。方法としては、年代の違う恋愛ドラマをリストアップし、台詞を文字化して、愛情表現を分析、比較した。

11080075 毛利 沙希

「差別語の変遷について—職名を事例に—」

テレビ番組や小説、雑誌、漫画などのあらゆる本の、「おわび」や「おことわり」として「差別語」、「差別表現」の使用について言及されている。しかし、「差別語」、「差別表現」の基準はあいまいである。本稿では、「差別語」、「差別表現」、特に職名についての「差別語」、「差別表現」を取り上げ、時間的変遷から、「差別語」、「差別表現」を見た結果、法的な認識と一般社会の認識にずれがあることがわかった。

11080077 矢島 大

「チェスをする知性」

主として言語はコミュニケーションの手段であるが、チェスやトランプはしばしばそれと同質となる。特にチェスはランダムな要素が一切介入しないゲーム性により、プレイヤーが指した手を見れば考えていることがわかる。チェスは知性のゲームとして世界で広く楽しまれているが、このゲームで最も強いのは人間ではなくコンピュータである。ではコンピュータに知性はあるのか。実際にコンピュータを倒し、彼らの知性を考察する。

11080078 山岸 孝明

「『走れメロス』における脚注の変化と比較」

基礎学力の低下、特に語彙力の低下は講義内容の理解にも影響を及ぼしている。それゆえ、教員たちは学生の語彙力のレベルを把握したうえで授業を行わなければならない。本稿では、中学生が学ぶ定番教材である「走れメロス」の脚注の注釈の通時的比較を行った。その結果、一旦昭和52年に脚注の数が急激に減るが後に少しずつ増える。しかし、現行では脚注はなくなるが、逆に注釈の

説明は増えていることがわかった。

11080079 楊 曉峰

「日中ビジネス文書における『受け取り』の表現と語彙の対照研究—日本語と中国語の対訳を中心に—」

日中ビジネス文書における「受け取り」の表現と語彙の対照研究は、日本語、中国語のどちらも「受身」の立場で意味を表す。しかし、その方法で日本のビジネス用語、また尊敬語や謙譲語を用いると中国語の「官腔」の観点とは不一致の状態となり、それらに一致する共通点も見当たらない。日本語と中国語は漢字を使うが、使い方に相違点があるからだ。本稿は、これらについての注意点と問題点を提示し、持論を加え整理したものである。

11080080 葉 美鳳

「識字率からみる識字教育—日本と中国を比較して—」

1870年当時、就学率が30%ほどであった日本であるが、現在の日本の識字率は約100%である。日本の識字教育はいかにして進められ、成功をなし得たのか。この問いから、識字率について日本と他国を比較、考察し、現在のアジア地域の教育、とりわけ中国の教育問題を、歴史、地理、経済などの方面から検討する。中国の識字教育の遅れは国全体の障害であり、教育の普及は、今後の中国の発展の大きな鍵となる。

11080081 李 根

「『ついに』と『とうとう』の意味・用法」

日本語の副詞は一つ一つの語を特定の目的・対象だけに使うことが多く、しかも、似た意味を持つものが多いため、どう使い分けるかを習得することは日本語学習者にとって大きな課題の一つである。本論ではその一例である「ついに」と「とうとう」について、多くの用例を観察しながら用法の違いを明らかにした。これを基に、今後、多くの副詞について用法を明確に示して日本語学習者の理解を助けるための体系的な記述をめざす。

11080082 李 文テイ

「日本語による身体部分の慣用表現」

本論文は、日本語による身体部分を用いた慣用表現の研究であるが、特に「頭・耳・手・足」を研究対象の中心とし、より幅広く慣用句の理解を深めるというものである。外国人学習者が日本語の慣用句を使え、伝えたいことをより正確に伝えることができるようにするのが目的である。拙稿では、中級後半から上級の学習者を対象に、よく使われる慣用表現を「頭・耳・手・足」の4分類にし、まとめた。

11080901 郭 国建

「第一人称の日中比較対照」

日中の両言語は第一人称代名詞が多い。中国語の第一人称代名詞の現状と変化を歴史的に分析し、日本語の第一人称代名詞を人間関係の面から分析する。両言語を文化的、言語構造的、人間関係の面から、先行研究を踏まえて、似た部分と違った部分を分ける。中国語も日本語も時代の流れによって、第一人称代名詞の数は減りつつある。その中で、「我」が中国語の第一人称代名詞として汎用性のあるものとなった。

11080902 小磯 雅章

「日本語教師養成の現状と政策的課題」

国際交流基金や文化庁の行った日本語教育の実態調査を基に日本語教育の現状について分析した。その結果、日本語学習者の増加、日本語教師養成講座の受講者数の減少という事実を得た。これを踏まえ、各省庁の施策を基に日本語教育養成の課題と解決を追究した。所掌機関の散在化という問題の解決、そのために、例えば公的な免許や資格制度の擁立など、政府の一貫性のある日本語教育施策の企画立案が必要であるという結論に達した。

11080903 薩仁 函亜

「民族学校制度の変化の影響—中国内モンゴル民族学校の例にして—」

中国少数民族学校教育では漢民族と違う学校教育がなされている。本研究では、中国内モンゴルにおける民族学校の学校教育が変わったことによる影響を明らかにするために、民族学校の小中学生92名を対象にして、言語や文化の接触機会や自覚している言語能力、母文化における伝統遊戯との頻度などを質問紙調査した。その結果、「母語より漢語の成績がよい」、「母語より漢語の利用が多い」などの事実がわかった。

11080904 徐 丹

「五十音図の成り立ちから見る日本語」

日本語を勉強するにあたり、最初に五十音図から勉強を始めた。五十音図の歴史は日本語の言語の基礎である。英語のアルファベットや中国語の拼音と同じようなものであろうかと考えていたが、その誕生は異なっていた。五十音図の由来を梵字や反切の方法などから調査と考察をし、日本語の成り立ちの歴史と、それによって見えてきた他言語には見られない特異な性質などについて探求したものである。

11080905 鈴木ひかる

「震災時における『がんばれ』という『励まし表現』について」

東日本大震災で使用された励ましのことば「がんばれ」、東北方言の「がんばっぺ」「けっばれ」に

関する語彙から見たイメージ調査を行い、知見と問題点をまとめ、普段、人は「がんばれ」についてどのようなイメージを持っているのかを、ポライトネス理論を使用して明確化することを目的とする。さらに、東北地方以外の県で使用されていることが判明した「けっぱれ」は、いったいどの方言と認識されているのかを明らかにする。

11080906 鄭 翠

「日本語の敬語と『コンビニ敬語』について」

日本語の敬語は、話題とする人や物事、また聞き手が自分とどんな位置関係にあるものと扱うか、その気配りを言葉づかいに表す仕方である。敬語によって具体的な情報を伝達することができるだけでなく、敬語を通じて打ち解ける場面と雰囲気を出すことができる。本論文は、近代日本語の敬語に対する影響がある「コンビニ敬語」とその問題点を追究し、その使い方が正しいかどうかと今後の課題について論述した。

11080908 朴 恵珍

「日本語と韓国語のあいづちの比較」

日本語は韓国語よりあいづちを打つ頻度が多いという印象を受ける。本研究で分析した結果、韓国語では143回、日本語では206回で日本語の方が韓国語よりあいづちを打つ頻度が多いことを確認した。機能では、両言語で一番多いあいづちは「理解」であった。次に多いあいづちは日本語では「継続」であったが、韓国語では「感情表出」であった。機能においては大きな差異が見られたことを明らかにした。

11080909 盧 小雲

「日本語と中国語の感謝場面における表現の比較」

文化の違いによる感謝表現が原因で、外国人と日本人との間に、コミュニケーションギャップが生じることがある。留学生に対して、適切な感謝表現を習得させるためには、様々な場面で日本人と留学生が抱く感謝の気持ちと、その気持ちを表現する言葉の使い分けを、予め把握しておく必要がある。

本論文では、日本語と中国語の感謝の表現について論じる。データは映画やドラマでの発話を収集し文字化したものである。

11080910 小栗 明子

「日本語教育におけるマンガ利用の可能性」

マンガは日本の文化として受け入れられ、日本語を学習するきっかけの多くが日本のマンガであるということが様々な国の調査でわかっている。

そのマンガを日本語教育に取り入れれば学習者のモチベーションが上がり、学習の効果も上がる

のではないかと考え、本稿では、マンガは日本語教育に有効であるのか、どのような利用の可能性があるのかを考察した。その結果、社会文化能力、社会言語能力の育成に有効であることがわかった。

11070040 関 大介

「外食産業の比較と共通点」

この不況でも飲食店の出店がとても多い。その中でも特に多く見かけるのが一般的に言われるレストランやファーストフードなどである。そして、居酒屋の外食産業への進出があり、外食産業の出店が増え続けている。今世紀最大の大不況といわれている今、この外食産業という業種が社会にどう貢献し、そしてどんな効果をもたらすのか。さまざまな外食店のメニューを比較し、具体的に外食産業の共通点を述べる。